

たより

『美紗の会』 ニユース

第31号

平成十一年五月二十日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子

第十六回 美紗の会を終えて

百瀬 靖彦

このたびの美紗の会は私にとって二度目。昨秋の会が終わってやれやれと思っていた矢先、「今度は二月におひきぞめ」と聞いたときは正直ギョツとしましたが、兎に角無事終了してホッとしているところ。池之端界隈は前回の銀座より小唄発表会には相応しい場所、襖と障子に囲まれてやるのがまた良かったと思います。

習い始めてまだ一年にもならないので、発表会の様子を写すの訳がないのに大久保編集長から「今度は断れませんか」と駄目を押されてしまいましたので、赤坂クラブの様子と私が初めて小唄を習って感じたことを恥を忍んで書いてみます。

今回のおひきぞめは全部で三十六曲を十九人で唄い上げたわけですが、加藤さんの合間の紹介が大変面白く、よくまあ調えたものと感心しました。もっとも師匠のコメントなのでしようが、唄の良さ悪しのまだ判らない私にとって、そっちの方がよっぽどよかったです。裏面に聞いたのは、赤坂クラブの兄弟子さんが唄う曲とお稽古で覚えた曲だけ、ほかは右の耳から左の耳に音が通過するだけというのか悪いのかよく判らないという始末。これも沢山唄って年期が要るといふことなのだ納得した次第です。

でした。前回もそうだったように思います。沢山の前にこ一番という時に調子で不思議な方々のようです。細井会のメンバー内藤さんが弾き語りなされた「四糸の橋」は前回友国さんが唄われて知っていたのですが、お上手だと思いました。高音の苦しいところで発声がお稽古の時に師匠が言っていたとお稽古の発声でそのお手本のようにうりました。

赤坂クラブのお稽古は月曜日。実は月曜日はしんどいのです。金曜日の方が遅くなっても気楽にやれるからいいのですが、でも金曜日にもっとご多忙な方が大勢居られるようです。

「酒でも飲まずにやっつてられネ」と言うのは私も賛成してきます。五時まで仕事でガタガタしてたのが、簡単に小唄の世界に気分転換できやしません。そんな訳ではじめて前にグツとやっつて勢いを付けてからチントンジャンの調子に乗っていきけるのです。

お稽古は二時間で終了。終わってからは、これがまた楽しみ。見附の駅にたどり着くまで又一時間位かかっています。正直言ってどっちが目的なのか時々考えてしまうことがあります。

小唄を始め、今でも困っているのは唄の方の楽譜がないことです。シャープさんとフラットさんばかりの音程であるし、三味線に合わず間合い

はその唄でそれぞれ違うので困ってしまいます。しょうがないのでノートにミミズが這ったようなねつた線と合間の出だしが判るよう印を付けたらしてやっています。古き良き時代の日本伝統音楽は判りますが、今の時代に若い人達に継承するにはもう少し合理的な練習方法があってもいいのではないかと考えています。

新しいお稽古の曲は、師匠の唄うのを録音して覚えます。録音はミニディスク(MD)に録音します。MDはデジタル方式の最新録音技術を取入れているので小唄の練習には大変便利です。

例えば、カセットテープでしたら聞き終わったら巻戻しませんがMDは戻す必要がありません。聴きたい曲をワンタッチで選曲するとすぐにプレイします。曲をリピートして聴きたいのであれば、REPEATボタンを押せば何回も繰返し演奏するといった具合で練習にはピッタリです。

ちなみに私の使用しているMDはソニーのMZ-R50ですが現在はモデルチェンジしてもっと良いのが市販されていると思います。

かれこれ習い始めて十ヶ月。次回美紗の会は暫く聞いているので、今度は暫く聞かれています。丁見が違っているの、三味線に合わず間合い

「橋姫」によせて

照沼 太佳子

男を殺す妄想にかられたことが一度だけある。きつかけが何であつたか思い出せない。永遠に自分のものにと、浅はかな女心ではなかつたかと思うが。そんな自分に驚愕したことが、心に残り、他は今や記憶もあやふや。私の女心とはけつこういふ加減なものだと知つた。人を愛したことが一度でもあれば、情念とよばれる感情の書ほどのものは誰しも持っているのではないだろうか。それはおよそ手にあまる代物で、できれば人様のことにまで関わりたくない。恨みなどは思つてしまふ。

許まで行きながら、陰陽道のぬりまに敗れ、ついに夫を殺せぬま、深い闇の中に帰つてゆく物語である。…ついに報いられず目的が遂げられなかつたのは、女の弱さであるが、その弱さこそ、たぶん、夫に残して来た愛の片鱗であつたにちがいない。その忸怩とした割り切れぬ愛に、この女の人間味のやさしさがあり、作者の解説を読みつつ語り、モダンダンスと、まったく異なる表現を見比べていきながら、布唄師匠の出番を待た。母はご機嫌である。会場には馬場あき子さんの姿もある。ミィハーごころも満足。親子で素人批評合戦を小声でやりとりするうち、リサイタルはメイン・イベントを迎えた。

たという「美しさ」ではなく、はかなく、哀しい美しさ。「橋姫」を象徴するフレーズを唄われた時、涙が出た。この言葉にこれほど哀しく歌える人は他にいないだろうと思つた。後半には誰いような表現もありません。唄の領域の広さも伺い知ることができた。

演奏が終わるやいなや、母が私に言った「あなた、本当にあんなに素晴らしい方にお三味線と唄を習っているの？」ちょっと鼻が高かつた。数日後、布唄師匠の糸の音色と唄が忘れられないという母から、こんな歌が届いた。

風巻かれて 狂えるごとく
舞う雪を
橋の灯 愛しく 闇より透かす

情念の世界を描いた歌人・馬場あき子の「橋姫」を題材に、藤間流舞踊家の加藤孝子さんがリサイタルを主催なさることになった。昼と夜の部があり、それぞれに出し物が変わる。能や語り、モダンダンスなど古典・現代お取り混ぜた様々な手法で「橋姫」の世界を表現するというユニークな試みだ。その中で昼夜共通に登場する主役たる出し物が加藤孝子さんの創作舞踊。わが布唄師匠が曲を書き下ろし演奏なさるといふ。

全面的に打ち出された「情念」といふ言葉に少々後れれしつつも、弟子である前に西松布唄の熱烈なファンである私としてはやはり見逃すわけにはいかない。また母が熱心に短歌の創作活動を続けている。そういえば今年恒例の正月歌舞伎見物に招待することを受けての日の休日、新国立劇場小劇場へ出かけてみることにした。

二年の年月をかけて作成していた西松布唄の「クレスン トムーンブルス」が、五月にいいよ発表となりました。このCDは江戸情緒たっぷりの端唄・小唄に加え、松岡正剛氏作詞の織部好みの作曲及び三曲の新作を交え十七曲で編成されています。ジャケツトは、ジミー・ヘンドリックスやアレックス・バークなどのマイラー写真で有名なニューヨークのカメラマンのアイラコーエン。デザインはT.B.デザイン。研究所の山口謙太郎。解説及び英訳はジョン・ソルト。ハリウッドのハイムン・ヌーンならではのセンスで江戸音楽が鮮やかによみがえる刺激的な一枚となりました。皆様是非お求め下さい!!

「夫の愛の背信に報いるため、鬼となった女が、夫の枕

布唄師匠が地方をつとめられる舞台を何度か拝見している。その度に踊り手の方には大変申しわけないと思うのだが、どうしても三味線と唄にきぎ付けになってしまふ。今回はさらさらの舞台のために三分の大作を作曲されたのだから、なおさらである。

布唄師匠が「橋姫」といふ題材に最高の答を出し得たかどうかを論じる能力は恥ずかしながら私にはない。しかし布唄師匠の糸と唄が紡ぎだした世界は、息をのむほど美しい。きれいにまとめられ



花の宴

西松布咏

日立市のお付き合いは、かれこれ九年になる。駅前にそびえ立つシビックセンターホールで、「花の季」と題して地唄舞公演をしたのが、きっかけである。以後毎年のように色々な企画でお世話になり、親しく行き来するようになった。果てしなく続く海岸線と広い広い空、そして何より日立なまりの純朴なお人柄に接する楽しみ。それが私の第二の故郷たる由縁である。今年四月五日に、日立市のみならず関東周辺に、多くのレジャー産業を展開なさっている「金馬車」の観桜会に出演を依頼された。会場は日立の海を背にした新社屋ビルの会議室。お客様に桜の美しさと江戸情緒をたっぷり楽しんでいただくごと、社長はじめ社員一同の心尽しの趣向が、あちこちうかがえる。桜の宴を盛りあげる紅白の幕が張られ、あちこちに俳句同好会の

方々の入魂の句。緋もうせんの舞台の左右には山奥から切つて来たという枝ぶりの良い桜とれんぎょうが生けられ、押し花作家の桜の花びら障子が、ほのかな灯りに浮きあがる。毎年桜の季節になると西行の「願わくば花の下にて春死なん」の句のように桜の散る下で心ゆくまで唄つてみたいと思つていた夢が、はからずもこの舞台で現実のものとなった。加藤さんの軽妙な語りを交えて、春らんまんの江戸から舟に乗り吉原へご案内！と並木駒形を皮切りに、夜桜や。春風さん。この先に……と桜にちなんだ小唄がつづく。その昔は、この様に四季の移り変りを楽しみながら男女の微妙なやりとりをにぎやかに、時にはしんみりや唄つたのだらう。春風さんや主の情で咲いたじゃないかなぜに吹いたか夕べの嵐。現在にはセクハラだのジェンダー

だのと色々な権利主張がびかう世の中だけれど、せめて唄の世界には景色の中に微妙な感情を読み込む心のじみを残してゆきたいと思う。続いて唄つた「四条の橋」にも男の心のじみが良く出ている。主君の仇討を数日後にひかえた蔵之助が、四条大橋のもとで酔眼朦朧とした風情で、ほんやりと遠くに灯を見る。〆四条の橋から灯がひとつ見ゆる。あれは二軒茶屋の灯か、丸山の灯か——この短かい行に男のゆるぎない決意を見せる。なんとも切ない男の孤独の燃える灯である。私はどうやらこの舞台で、ひととき江戸へ心の旅をしたようだった。

〆おぼろ夜のほのかにゆらくほんばりに、手拍子打てばちらちらと散るを惜しまん春の宵。最後に笠森おせんの一節を唄つて日立の花の宴の幕を閉じた。

巽八景観賞記

四月二十九日「みどりの日」に国立大劇場において、花柳寿楽師一門の「錦会」が開催された。

第二部に毎回美紗の会演奏会の最後を端麗な踊りで飾つて下さる飛田さんこと花柳千寿文師がご出演とあつて我が美紗の会の有志が応援に駆けつけた。

四月二十九日「みどりの日」に国立大劇場において、花柳寿楽師一門の「錦会」が

た辰巳(深川) 附近の名所を近江八景になぞらえて詠み込みながら男女の仲をしんみりと情趣豊かに描いたものである。

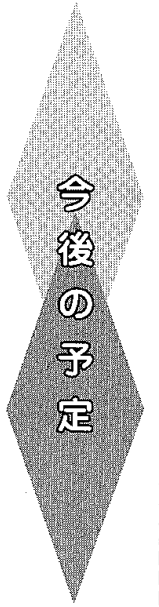
幕があくと障子を背景に、うす紫の着物に帯をつの出しに結んだ芸者の後姿がまるで一枚の浮世絵のように浮かびあがる。唄の冒頭に「恋と情の深川や縁も長き永代の」とあるようになじみの客に身も心もひかれてる辰巳芸者の微妙な女心を見事な肩の使い

幕があくと障子を背景に、うす紫の着物に帯をつの出しに結んだ芸者の後姿がまるで一枚の浮世絵のように浮かびあがる。唄の冒頭に「恋と情の深川や縁も長き永代の」とあるようになじみの客に身も心もひかれてる辰巳芸者の微妙な女心を見事な肩の使い

今後の予定

- ・五月十九日(水) 十六時五〇分〜十七時四〇分 日本音響学会特別講演「江戸の音」東京工業大学講堂 法政大学江戸文学教授田中優子氏と共に
- ・五月二十三日(日) 十八時三〇分〜二十一時 浅草「細井」において月例会
- ・六月四日(金) 十七時より二〇時三〇分 第二十五回草の会 国立小劇場 関崎ひで女一門地唄舞の会

- ・六月五日(土) 十三時より十六時 滝口修三・北園克衛文庫特別講演
- ・六月九日(水) 十六時より 東京タイポグラフィ―大阪展、堂島アキシビルDD Dギャラリ― 浅葉克己氏 照沼多佳子氏 ジョン・ソルト氏と共に



方や細やかな指のしぐさで、上品な色気を表現された。辰巳芸者は張り意地の気つぷの良さで知られているが、女子の念も通し矢の届いて今は張り弱く……と女の可愛らしさや心の揺れを細やかに踊られ、薄曇りに書く筆のさばきを……でさらさらと巻き紙に文を書き、きりつとした目線で、心の定まらぬ男への一途な意地を見せた最後の見舞は庄巻で思わず嘆息をもらしてしまつた。二年前に拝見した「深川八景」もいまだに心に残つているが今回の「巽八景」は、それを塗りかえる見事な「一幅の絵」であつた。 N・F

・六月二十七日 十九時より、十五時 舞踏公演・西鶴「好色一代女」より 舞踏家 元藤燐子氏と共に 目黒土方巽 アスベスト館

お待たせしました。たより三十一号です！
今回、原稿の集まりは良かったのですが、その後手間取つてしまいました。でも内容は盛り沢山です。
次号も皆さん、楽しい原稿よろしくお願いします。
大久保

編集後記